

〈小特集：古今集一一〇〇年によせて〉

古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム



●概要報告

平成十七年、西暦二〇〇五年。今年、和歌研究者の全国組織である和歌文学会の提唱により、全国的な規模で古今和歌集成立一一〇〇年・新古今和歌集成立八〇〇年を記念した行事が繰り広げられた。このような流れを承け、「古今伝授之間」を有する当地、熊本においても、この記念すべき年を祝しつつ同時に、古今集を、和歌を、そして古典を見直す契機とすべきでないかと考え、日本文学関連学科を設置する市内三大学四学部が合同で、「古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム」を企画実行するに至った。

以下に報告するように、当初はまことにささやかな企画として発案され出発したが、多くの幸いに恵まれ多数の方々のご協力を得て、多彩で充実した催しとして大きな成功を収めた。同時に、幾つかの点で従来にないユニークな試みとなりえており、全国各地で開催された関連企画と比較しても遜色のないものであったと自負している。

古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム行事一覧

◇ブレゼミナー（10／2～10／23、於くまもと県民交流館パレオ

・水前寺成趣味園古今伝授之間）

「万葉から古今へ」

山崎健司（熊本県立大学）

「山のあなたの（月）―古今集の現在」 小川幸三（熊本大学）

「古今集の古筆切―書の立場から」 久多見健（尚綱大学）

「古今伝授の世界」 鈴木 元（熊本県立大学）

◇ワークショップ「古今集を学ぶ・歌う・体験する」（11／4、於熊本県立大学）

熊本県立大学）

・三大学の学生による共同研究成果報告

「肥後の歌枕をめぐって―その成立と現在」 佐方章子・田上希・原岡佑里・船本日佳里・松本奈津美（以上、県立大学文学部三年）

文学部三年）

「古今伝授の間とその室礼」 松尾郁美（県立大学文学部四年）

「世阿弥の能と和歌」 本園明宏・椎原 誠（以上、熊本大学大学院文学研究科一年）、山住洋平（熊本大学大学院教育学研究科一年）、佐野北斗（熊本大学文学部四年）、有田のぞみ・富永果穂李・迫 彩子（尚綱大学文学部三年）、松尾郁美（県立大学文学部四年）

・和歌の披講―解説と実演 講師 青柳隆志（東京成徳大学）

兼築信行（早稲田大学）

◇講演会（11／5、於熊本市総合女性センター）

「和歌集千年の力」 安永露子（歌人、「椎の木」主宰）

◇シンポジウム（11／5、於熊本市総合女性センター）

「言の葉しげり心の花ひらく―いま古今集をよむ―」

司会 鈴木 元（熊本県立大学）

講師 青柳隆志（東京成徳大学）

高野晴代（星美学園短期大学）

浅田 徹（お茶の水女子大学）

狩野琇鵬（喜多流）ほか

◇熊本大学附属図書館公開講演会（11／6、於同図書館）

「井筒」 森 正人（熊本大学）

「絵と歌と物語と」 森 正人（熊本大学）

◇熊本大学附属図書館貴重資料展（11／4、6、於同図書館）

「古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム」 顛末記

ことの起こりは、平成十七年度から各学部の研究成果を地域に還元するために、その成果報告会を学外において実施すべしという、県立大学地域交流委員会の決定であった。従来からも学外での連続講座などの実績はあるものの、研究成果の地域還元は、その方法、形態、内容など本学のみならず多くの大学が当面している課題である。しかも第一回目ということであれば、学外からできる限り多くの参加を得て、学ぶと同時に楽しんでいただける企画を、との思いが強かった。

そうこうする内に、今年の一月であったろう、地域交流委員の米谷氏との雑談の中で、何か企画はないかという話になり、そこで思い起こしたのが和歌文学会の提起になる古今集・新古今集にかかわる一連の企画であった。そこか

ら計画は急速に動き始める。大学事務局企画課の尽力により、学外からの講師も計画に加えることができる予算が確保されたため、その人選を始めた。和歌文学研究に朗詠法という視点から新たな局面をひらいている青柳隆志氏の名前が挙がるまでにさほどの時間はかからなかった。後は日本語日本文学科の教員が何人か、古今集にまつわる小講座を開いて、これで企画の輪郭ができあがったものと考えていた。

この当初の原案が大きく修正を迫られたのは、二月のことであった。ここ数年恒例となっている、熊本大学附属図書館永青文庫の調査の際、熊本大学文学部長、森正人氏に県立大学で進めている計画を紹介した。その時には、これで古今集に関連した能でも出せると、注目を引くのでしょうかという、ほんの軽口の話題であったのだが、森氏の「お能ならば出せる」という思いがけぬ発言をきっかけに、講演会とシンポジウムを絡めましょうとの提案へと進んでいくのである。こうして、県立大学では青柳氏を軸として、研究成果報告会の企画を提案しつつ、同時に熊本大学でも予算確保の折衝が進められ、ここに本格的な連合企画が姿を現すこととなる。

年度が変わった四月から五月あたりに、実行委員会がもたれるようになった。この頃には、熊本大学の教育学部、尚絅大学も加わる形になり、規模は大きく膨らんでいた。

この時点で全体を貫く方針として、なぜ熊本で行うのかという視点を明らかにする、素朴な古典賛美ではなく何故いま古今集なのかを考える、学生を巻き込んだ企画とする、という三点が確認された。このことは、本企画の独自性という点で大きな意味をもつものとなったと言ってよいだろう。ことに学生の主体的参加という点は、共同研究成果報告という形で特筆すべき実践となった。この点は、今年、展開された他の多くの古今集関連企画には見られない特徴であり、大学間の連携による運営という点と併せ、大きな成果を残すことになる。

十月に入ると、くまもと県民交流館の協力を得て、講座が開始された。三大学の教員が、各自の専門の立場から古今集へアプローチした講義を開くというもので、それは同時にメイン企画への関心の喚起という意味を含んでいたが、予想外の反響に驚かされることとなる。定員制限のため、多くの申し込みに対しお断りをしなければならなくなったのが心残りである。これに並行して、少しずつ新聞等でも紹介されるようになり、十一月四日を迎える。



学生による研究成果発表

まず学生の研究成果発表。肥後の歌枕についての報告は、県立大

学三年生の自主研究で、その研究調査には大学後援会からの援助があったことも付記しておきたい。現地をめぐりながら、歌枕の現在を視覚的に示してくれた発表であった。

古今伝授之間についての発表は、県立大学四年生の卒業論文研究の一部である。古今伝授之間が熊本に伝来した由来を紹介しながら、かつてその部屋の中でどのような空間が演出されていたのか、を浮かび上がらせてくれた。最後の世阿弥の能についての発表は、三大学で参加学生を募り共同で調査を進め、その成果を最終的に熊本大学の院生が中心となってまとめ、発表してくれたものである。日常的交流の少ない中であって、希有な実践例である。世阿弥の謡曲における和歌の受容状況を調査したもので、古今集の影響が圧倒的に強いことを確認させてくれた。

続けて青柳隆志氏、兼築信行氏による和歌の披講の解説



上 青柳氏 / 下 兼築氏

と実演が行われた。軽妙な語り口から、和歌を詠うということについて、そして和歌会席の場のありようや、

和歌懐紙の書き方について学んだ後、いよいよ実技編が始まった。既に狩衣に身を纏った十名の学生が会場の一隅に控えていたが、舞台上へ呼び出されて講師の指導のもと一座して歌を詠吟する時、舞台の上はまご

うかたなく和歌会席の場に変じた。実は、当初、青柳氏に講師をお願いしようと考えた時には、ここまで大がかりな演出による実演はまったく想定していなかった。青柳氏ご本人に少々実演していただければそれでよし、という程度の考えでいたのだが、青柳氏から具体的プログラムを示されてはじめて、催しの成功をはつきりと確信するに至った。そのため、講師は本来一名しか想定していなかったのであるが、改めて学長特別交付金を申請することで何とか兼築氏にもおいでいただくことが可能となった。この点も関係各位に御礼申し上げたい。実演を見て実感したことであるが、講師ひとりではずいぶん規模と感動の小さなプログラ



披講実演風景



フォーラム実行委員長挨拶・森氏

りの技法から古今集の受容の諸相を示し、古今集が古典として生きる意味を問うた浅田徹氏。企画者の期待通りの充実した問題提起に、シンポジウムの成功も半ば約束されたものとの印象はあったが、後半は会場からの質問をまじえた討論であり、展開の読めない不安は



総合司会・山崎氏

ムに終わっていただろう。翌五日は、歌人、安永路子氏の講演に始まり、シンポジウム、能「井筒」の上演と盛りだくさんの一日で、わざわざ県外からの参加者も見られた。安永氏の講演

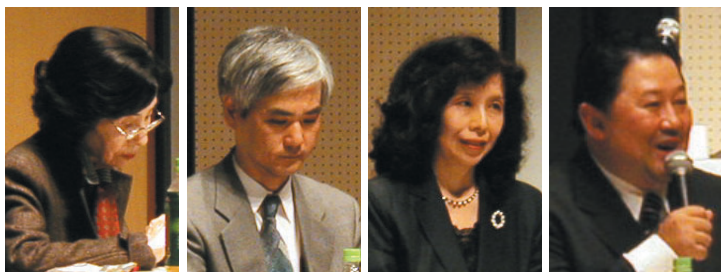
残る。しかし、会場からの質問用紙の束に、良い意味で予想を裏切られ、司会は質問の山を捌くのに翻弄されるありさまであった。時間があれば、会場から直接発言していただいて、討論を深めたいと考えていたのだが、それが叶わなかったのは残念であった。



講演風景・安永氏

プログラムの最後は、喜多流能楽師、狩野琇鵬師による「井筒」の上演。狩野了一師による解説という最高の水先案内を得て、普段は能になじみのない方々にも楽しんでいただけたのではないかと思う。必ずしも能舞台に適さない会場で、敢えて上演に踏み切って下さった狩野師には御礼のこと

ばもない。翌五日、全体の締めくくりとなる公開講演会が熊本大学附属図書館で行われた。全体の指揮をとって下さった森正人氏による講演に会場はほぼ満席。シンポジウムでお見かけた顔があらこちらに認められる。このような熱意に支えられ、フォーラム全体が成り立っていたことを、改め



シンポジウム・左より安永・浅田・高野・青柳の各氏

て実感する。なお、前記の企画と並行して同館では永青文庫本の歌書を中心とした図書展示が行われていた。貴重書のひとつ一つに、来館者がじっと見入っている姿が印象的であった。

最後は請われもしないのに展示終了時間まで立ち会い、展示品がひとつ、またひとつと書庫の闇に消えていくのを見守った。後には空虚な展示場だけが残る。

一ヶ月にわたった本企画も、かくして静かに幕を閉じた。

(文責 鈴木元)

△付記▽

このイベントを記念し、関係者の共著による古今和歌集の入門書を和泉書院から刊行の予定である。



能「井筒」